特279-14
1200601101901

考古圖集

始

I種
W
1200601101901

第二支那古代文化號

本集はさきに本會總會の一部として催ぜし諸家珍藏品の展覽品中の支那關係のものを蒐めしものなり。

(221) 銅磬

我が金屬工藝品中に磬なるものあり、その源流の支那にあるべきは略ほ推定し得べきも、我に奈良朝代のものの制を察すべき遺物なく、彼に六朝代のものとすべきものを見ず、されど古く周代の制を見るべきものとしては、「考工記」所載のもの、及び本遺品の如きものありて、遠き源流の彼にあるべきを想はしむ。

本遺品は銅製にして、上緣二折線に沿ふて、向つて右を鼓となし、左部を股となす。鼓の長さ四寸二分、幅六分五厘、股の長さ二寸六分、幅一寸一分八厘あり、而して股・鼓二線のよつて作る角倨句は百三十五度ありて一矩有半となる、考工記に磬の製作を記し、その寸法をのせしものあるも、それが解釋は考證學者の難解の一とするもの、今清の程瑤田の「磬氏爲磬章句圖說」(通藝錄)の解釋によりて本遺品の倨句を測りて所謂一倨有半を得、股の幅を略ほ二倍して股の長さを得、三倍して鼓の長さに近く、鼓の幅亦股の幅の約三分の二あつて、殆んど考工記の記載に合せるを見る。しからば周代の磬の制を見るべく、而して學界の難解の一とせられしものの冰釋せられしを得たりといふべし。

(222) 半瓦當

半瓦が周代に始まれるは、かつて之を說きしことあり。本半瓦も亦周代末期を前後するものならんか。瓦當の圖樣中央に樹木を配し、右に三巴文をおき、左に一獸を立たしめたり、獸は鹿か。描圖古拙の域を脫せざるも、洒々たる趣あり、古代に於ける支那藝術を語る一遺品となすを得べし。巴文・卍文が支那古代に於いて既に存せしは明かなる事實にして本遺品の如きもこれを示せるものといふべし。

(223) 瓦當

「秦漢瓦當文字」にこの種瓦をのせ、鳥蟲書四字瓦と題し、愈太學鄭耘門及び著者程敦の說をのせたり。卽ち愈太學漢書荒賢傳に、賢の女弟が昭儀となり、椒風宮に居りしことを引き、椒字は赤字と作り、風字は易に風は虎に從ふとあるによつて、虎形を上に加へしものと解し、以てこの四字を「椒風嘉祥」と讀みたり。而して程敦は「漢書楊雄傳」に

1200601101901

迎風宮あるを見て「迎風嘉祥」と讀むべしとせしに對し、鄭氏は初の文字を永字とすべきは明白なるべく、次字の上は爪に從ひ下は又に從ふを以て受字となすべし、嘉の下に一劃多きは當時の風に從ひしもの、是を銅印文に徴すべしとなし、最後のはこれを「祥」字となすべからず、宜しく「福」字となすべしとせり。しからば「永受嘉福」となる。三代以降の瓦當文字は鄭氏の更に說けるが如く、吉祥語をとるものあり、宮殿名をとるものあり、蓋し愈・程二氏は本瓦當文字を後者に從ふて解し、鄭氏は前者を採つて訓みしものなり。而して程氏は鄭氏の所說を評して「其說遂定」といへり、妥當を失はざるが如し。瓦の年代は漢代にあるべし。

(224) 有文土器

ラウフェル氏(Berchold Laufer)その著「玉」(Jade)に是が類品を示して漢代古墳發見のものたることをいへり。土製にして徑二寸九分八厘、厚さ中央部にて一寸、緣に赴くに從つて厚さ漸次減じ、以て斷面扁平形をなす。表裏に文樣あり、卽ち界圍三條、中央に大小の葉片を以て圍華文(ロゼッタ)を作り、界圍二條、鋸齒文繞らし、緣に斜行櫛齒文を施す、裏面亦大體に於いてその文樣表面に似たり。(表裏は便宜上いひしのみ)しかして共に空隙に細かき珠點を塡充せり。

ラウフェル氏蒐集のもの(Ibid. P. 307. PLXXXIX)亦文樣・手法本遺品に似たるものあり。而して同氏はこれが屍體埋葬のとき抑袖として用ひられしものたるべしと說けり。卽ち屍體が墓穴內に安んぜられし後、その姿を調へ、屍體の偏屈を防がんが爲め、袖其他衣服の各部に鎭子の用として置きしもの、これに本遺品の如き土器の外、銅及び玉質のものもありと說けり。暫く從ふべきか。

(225) 銅鋏刀及銅尺・銅劍及銅刀

共に漢代のものなるべし。銅鋏刀については述べず、銅尺はこれに金銀鏤を以て文樣を施せるもの、銅刀が內反なるは支那古代銅刀の一特質として注意すべし。

(226) 陶壺

全面黑色なるも、底部は黝黑色を呈せり。總高五寸二分、口徑一寸六分二厘、腹徑四寸三分、底徑三寸二分五厘、銅製の鎖をつけたり。文樣はすべて型押せられしものの如し。

(227) 璧及瑗

支那古代に於て璧の尊ばれしについては更めて言ふ必要なかるべし。その形狀の意義に於ては、漢代に既に璧圓は天に象るとせられたり。而して「爾雅」に肉と好(孔)との關係を論じて、肉の好に倍するを璧といひ、好の肉に倍するを瑗といふとあり、「說文」には更に肉好相等しきものを瑗といふとあり、されど遺物について見るに、必しもこの寸法を嚴守せしものに非ざるべく、中間型式の幾多有するを見る。本圖版のものの如きこれなり。今本圖版上段右より1 2 3、下段を同じく4 5 6 7とすべし、1は璧なるべく、質よろしからず、白色を帶びたり、肉徑二寸一分四厘、好徑八分一厘、2は蠟石製にして、肉徑一寸八分九厘、好徑六分七厘、3も蠟石製にして肉徑一寸八分・好徑一寸、瑗と呼ぶべし。4は玉製なるも粗質、蔵手文あり、肉徑一寸六厘・好徑四分、瑗か。5は玉製、飴色を呈す、小蔵手文を表裏兩面に散布せり、肉徑一寸七分・好徑七分二厘。6は玉製なるも白色を帶びたり、肉徑一寸二分・好徑三分八厘。7は玉製にして斑文ありて美し。肉徑一寸一分四厘・好徑三分二厘。

以上記せしものを見るに、所謂璧として珍重せらるゝものに比して粗質にして形式簡單なるを知る。本邦古墳及び石器時代遺蹟より發見する遺物中往々これらに類するものあり、そのすべてを通じては言ひがたかるべきも、中に璧と意義を等しうするものなきを斷ずべからざるが如し。而してこれを支那文化の影響とするも、甚しき誤には非ざるが如し。

(228) 玉器

上段向つて右より1 2 3 4、下段右より5 6 7 8とす。ともに玉製、1 2は琮なり。「古玉圖攷」に「說文」等を引いて琮を註し、車軏なりとし、「禮記」を引いて地を象るものとせり。3・4に於いては古書に之を記せしものなきが如し。5は璲なるべく、6・7は鉤にして、共に帶具なり。8は琥にして、說文に琥を註して死を送る口中の玉なりとせり。琥は舌を象りしものなるべきも、ラウフェル氏はこれに四型式ありとせり。本遺品はその一にして、蟬形をなせり、何故に蟬形をなせる琥を作りしか、これ興味ある問題なるべきも、學界に未だ定說なきが如し。

(229) 北魏觀世音三尊像

左右均齊を保てる、刀法の鋭き、肉のやせたる、まさに北魏式の特徴を示せり、また光背の文樣に注意すべきものあり。

露光量違いの為重複撮影

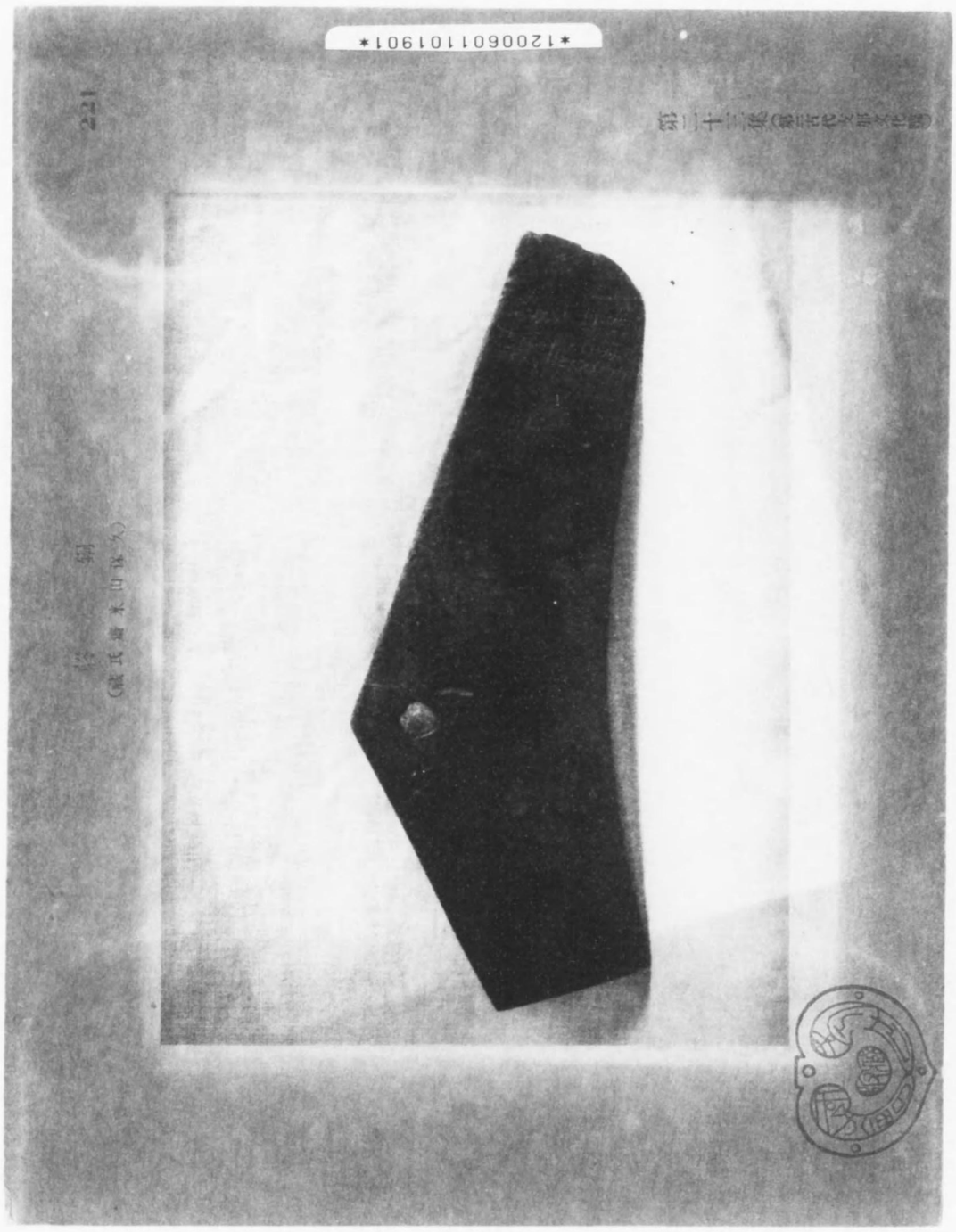
(230) 善業泥

土製、裏面に「天唐善業泥•壓得眞如妙•色身」(側點あるは墨品によつて補讀せしもの)の銘文あり。表面に佛像を半肉彫にせり、之れ供養の爲め數百千を作つて寺塔に納めて善業をなせしものなるべし。わが奈良時代の遺物に磚佛なるものあり、全くこの善業泥にならひしものには非ざるべきも、これが流を汲めるものなるべきは否定すべからず。

露光量違いの為重複撮影

(230) 善業泥

土製、裏面に「入唐善業泥歴得眞如妙色身」（側點あるは鎌倉によって補讀せしもの）の銘文あり。表面に佛像を半圓彫にせり、之れ供養の爲め數百千を作つて寺塔に納めて善業をせしものなるべし。わが奈良時代の遺物に磚佛なるものあり、全くこの善業泥にならひしものには非ざるべきも、これが流を汲めるものなるべきは否定すべからず。



12006011019 01

(京大考古学研究室所蔵)

銅鐸

(京氏遺跡出土)

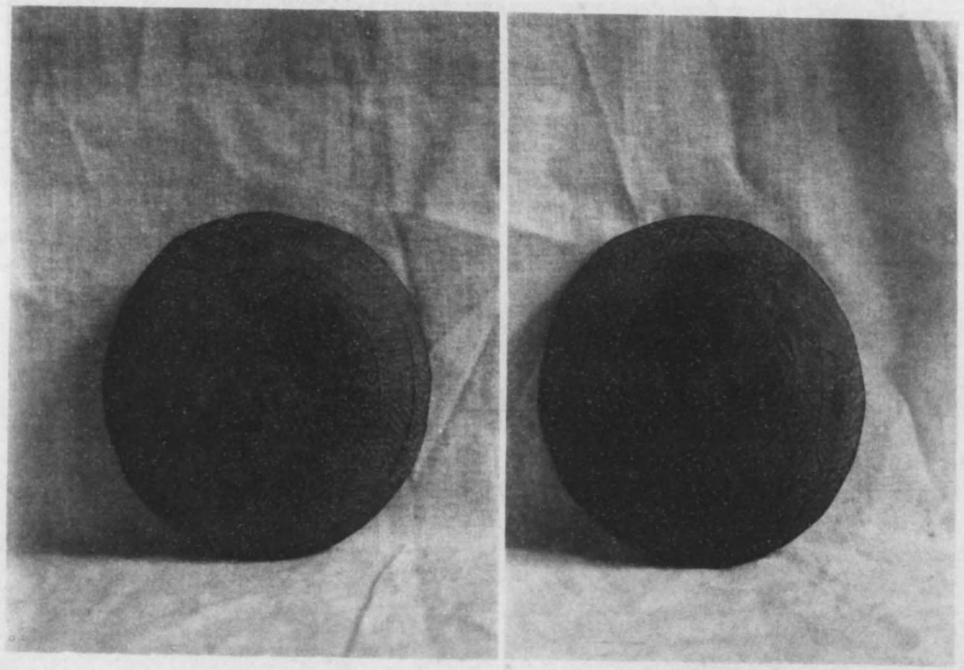
當　瓦　半
（藏校學術美京東）

當　　瓦
（藏氏靖本塚）

1200601101901

有文土器

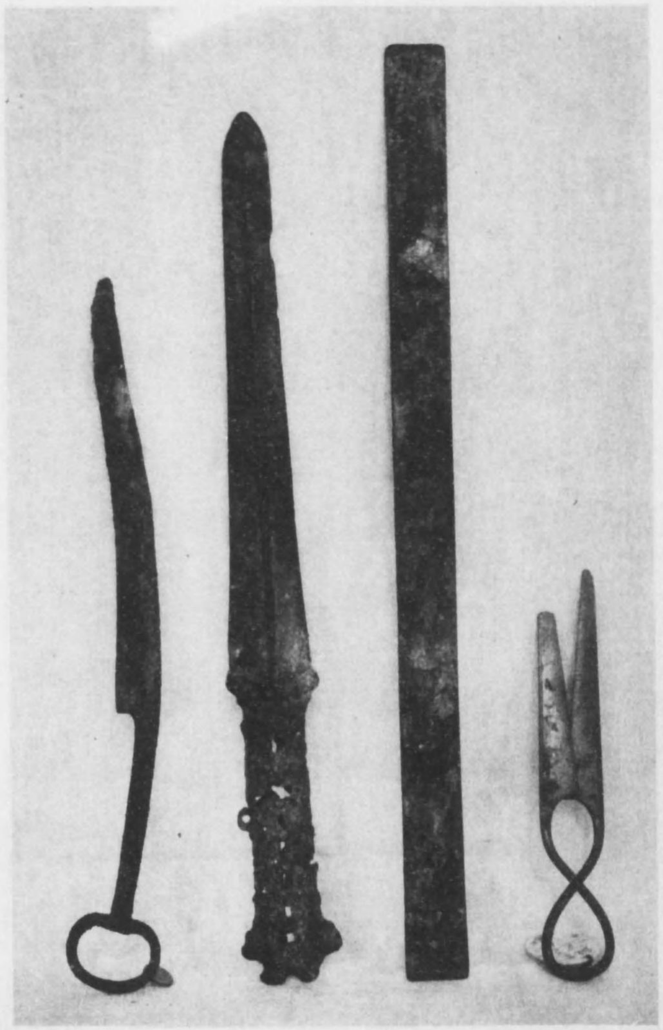
(藏氏吉若林)



1200601101901

銅劒及銅刀
（香取秀眞氏藏）

銅鋏刀及銅尺
（東京美術學校藏）



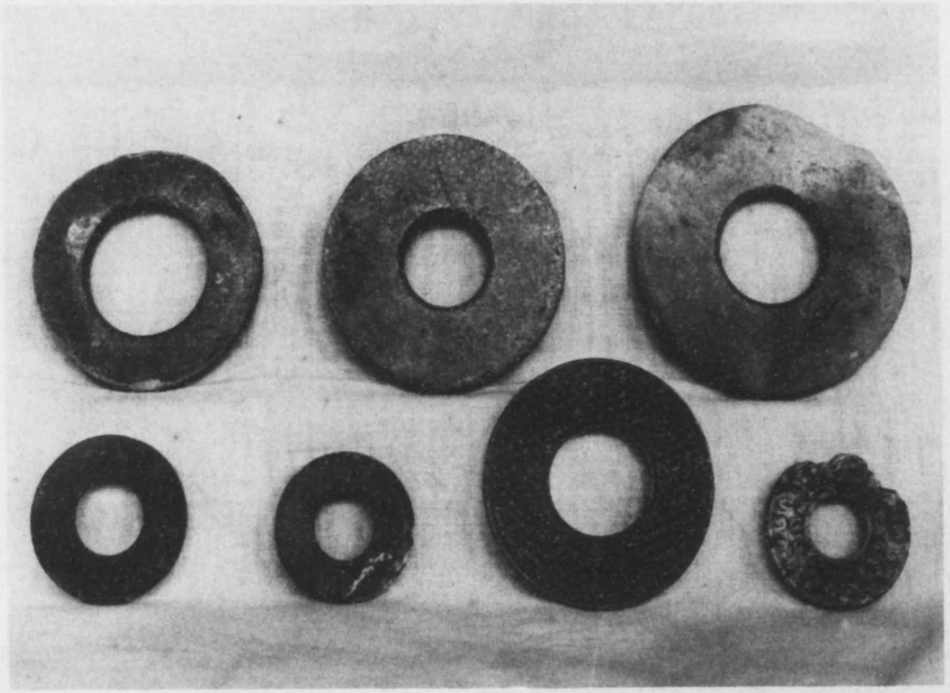
1200601101901

陶壺

(東京美術學校藏)

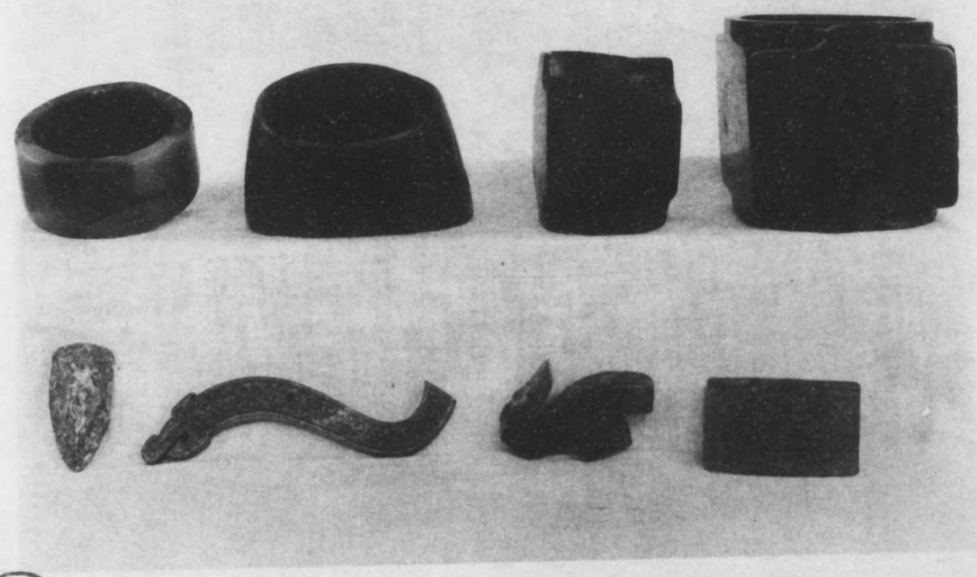
1200601101901

瑗及璧
(藏氏吉若林)



1200601101901

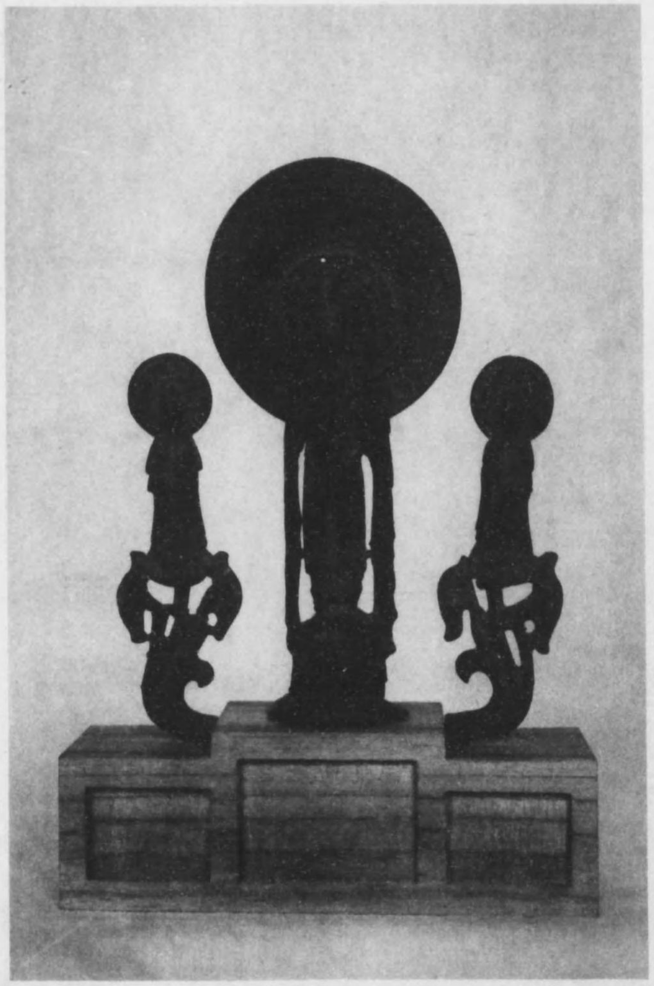
器　　玉
（藏氏吉若林）



1260601101901

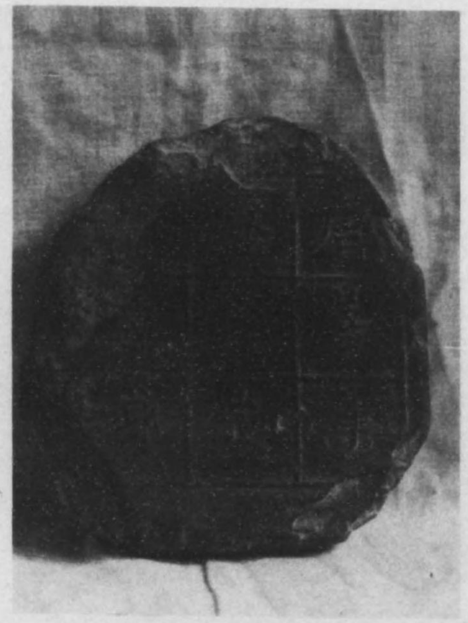
北魏觀世音三尊像

（塚本靖氏藏）



1200601101901

泥　業　善
(藏　氏　吉　若　林)



1200601101901

大正十一年七月十八日印刷
大正十一年七月二十日發行

複製不許

印刷所　東京市牛込區上宮比町八十八番地　考古學會
印刷者　東京市牛込區上宮比町八十八番地　高橋雄次郎
發行者　東京市牛込區上宮比町八十八番地　考古學會
發賣所　東京市牛込區神樂坂二丁目三十五番地　大倉書店
　　東京市牛込區神樂坂二丁目三十五番地　丸善株式會社

終